

## ダイアログ・イン・サイレンスにおけるシェアリングネイチャー

記入日：2015年 12月 1日  
環境に関する手話研究会 廣瀬彩奈

### 1. はじめに

手話で活動するろう者<sup>1</sup>のネイチャーゲームリーダーとして、これまでのネイチャーゲーム活動は主に幼稚園～小学部のろう児を対象に実施してきた。ろう者と聴者が共に自然をシェアリングするには、聴者も手話ができること、もしくは手話通訳の媒介が必要であると思い込んできたが、ダイアログ・イン・サイレンス (Dialogue In Silence : 以下 DIS)<sup>2</sup> の存在を知り、ろう者がインタープリターとして、聴者対象に DIS を実施することで手話ができない聴者でもろう者と自然をシェアリングできるのではないかと思うようになった。また、自然環境の中で実施する DIS のプログラムを考える上でネイチャーゲームは最適のツールとなるということが見出された。

一般に、ろう者と聴者が自然をシェアリングするには、聴者が手話通訳や筆談、身振りなどの“配慮”を行なうことによってろう者とのコミュニケーションの壁を打ち消すなどの手段が考えられがちである。これではろう者にとっては対等に自然をシェアリングすることができない。一方で、ろう者同士で語られる自然の見方は、聴者のそれとは違うのか、これまで疑問に思ってきたことでもある。自然環境の音情報が入らない分、あらゆる自然物をみて想像する癖がろう者にあるのではないだろうか。そしてその想像の世界を聴者に紹介する方法として、自然をイメージネーションするネイチャーゲームの内容と一致するものが多くみられた。

### 2. 自然環境の中で実施するダイアログ・イン・サイレンスの提案

ドイツのハンブルグを中心に行なわれている DIS は、ろう者がガイドになり、聴者の参加者をサイレンスの世界に誘い、音声以外の表現（手の形、表情、身体表現）を磨く場となっている。聴者にとっては社会の中における役割の逆転を引き起こし、新しい表現の可能性を見出すことができる。聴者はノイズ入りのヘッドフォンをつけることで、聴者の参加者同士でも音声言語による対話が困難な状況をもたらし、音声以外のコミュニケーションを考えざるを得ない環境にさらされる。

こうした DIS のやり方にヒントを得て、第1回『ダイアログ・イン・サイレンス@宍塚の里山』を2014年11月24日に茨城県土浦市にある宍塚で実施した。ヘッドフォンは用いず、聴者とろう者でグループを作り、音声言語以外のコミュニケーションの方法をお互いに考えながら「自然の発見」を伝え合うプログラムを行なったが、参加した聴者からは「人の話す音声がまったくない環境の中で逆に耳が研ぎ澄まされ、鳥の声が普段よりよく聞こえた」という感想がみられた。この第1回の実施を通して、聴者は自然の中でサイレントに過ごすことで自然の音に対する集中力が高まり、自然に対する気づきを得られるということが明らかになった。

第2回は、第1回と同じ場所で2015年10月25日に実施した。第2回実施においては、聴者が“サイレンスの世界”や“自然のさまざまな現象を表現した手話”を通して新たな自然への気づきを得ることを目標に、ネイチャーゲームをアレンジしたプログラムを考案した。また、さまざまな自然現象を手話で表現できることの奥深さを感じてもらい、手話に興味をもってもらうことをも目標とした。本紙では第2回の実施内容及びその成果について報告する。

### 3. 第2回『ダイアログ・イン・サイレンス@宍塚の里山』実施内容

日時：2015年10月25日

場所：宍塚の里山（茨城県土浦市）

対象者：手話のできない聴者12名（内、宍塚の里山保全活動サークルに属する大学生10名）

スタッフ：3名（報告者を含むろう者2名、手話通訳者1名）

<sup>1</sup> 音声言語と対等のツールで手話を使う聴覚障害者のことをろう者 (Deaf) とする。

<sup>2</sup> Web サイト「Dialogue In Silence」 <<http://www.dialogue-in-silence.com/>> (2015年11月24日現在)

時間	活動名	内容	ねらい
10:00	始めの挨拶	DISの説明 「宍塚」の手話表現の紹介	
10:15	宍塚に似そな生物を想像しながら徒歩で移動 自己紹介	参加者は空文字で名前を伝える。ろう者スタッフが読み取り、名前の手話表現を教える。	手話ができなかったり筆談用具がなかったりしても、伝える方法があることを知ってもらおう。
10:25	「ノーズ」のアレンジ 題①トンボ ②カモ ③ネズミ ④(ヒント「〇〇ネズミ」 カヤネズミ	ろう者スタッフが宍塚にいる生物を手話で表現する。1つの生物につき、いろいろな表現ができるので、1つの表現をするたびに「わかった」かどうかを確認する。「わかった」合図のしかたについては、手話で「胸に手のひらをあてる」ポーズをする。	同じ1つの生物でもCL <sup>3</sup> によっていろいろな表現ができること、また手話表現は生物の特徴を見事に捉えたものが多いことに気づいてもらう。
10:35	森のインタープリテーション  ①「木のシルエット」のアレンジ  ②「自然へのインタビュー」のアレンジ  ③ジョロウグモの巨大な巣	森を歩くときのルールは「音声禁止」。 伝えたいことがある時は身振りやホワイトボードによる筆談などで工夫する。  ろう者スタッフが表現する木はどの木かを当てる。  以下の3本の樹木それぞれの特徴について、どのようにできたのかをろう者スタッフ2人で想像しながら話し合う。参加者は、その話のやりとりを聴きながら樹木を観察する。 ●「ブラックジャックの木」(樹肌に手術の傷のようなものがみられる) ●「血だらけの木」(コゲラが同じ木のあちこちに作っている巣穴から、血が噴き出しそうに見える) ●「シジミの木」(カワラダケが生えている木。カワラダケの模様がシジミに似ている)	サイレンスの世界に入ることによって自然に対する感覚がさらに研ぎ澄まされる経験をしてもらう。  枝の付き方の違いや樹木にはえているコケをCLで表現することができることを知ってもらおう。今まで同じようにみえていた樹木1本1本に個性があることに気づいてもらう。  自然の特徴からみえてくる想像の物語を楽しんでもらおう。
11:00	違う種類の葉を集めながら、来た道に戻る	ろう者スタッフが、クモの巣ができるまでの現象を、手話で表現する。	森のあちこちにできているクモの巣を見落していたことに気づき、森の見方が変わるきっかけを与える。
11:10	「木の葉のカルタとり」のアレンジ	参加者は葉の特徴をCLで表現し、他の参加者にどの葉を表現しているかを当ててもらおう。	葉の種類によってCL表現が変わることを知り、また葉の種類の多様性を実感してもらおう。
11:25	振り返り(感想発表)		

<sup>3</sup> CL : Classifier (分類するもの、類別詞)。身体動作や物体の動き・形状などを手型で表現したもの。手話の基本要素となる。

#### 4. 成果と課題

参加者の感想(表1)からは、ろう者の自然に対する見方や想像力を知ることで、ろう者の自然の楽しみ方をシェアリングし、さらに自然物をCL<sup>4</sup>などでどのように表現するかを楽しむことができたようすが伝わった。こうした世界での体験を通して、いつも見慣れているはずの宍塚における樹木の多様性に気づくことができたように思う。1つ1つの自然物に対する想像力を働かせることと、自然の特徴を自らの身体で表現しようとすることによって、自然のミクロな部分が見えてくるのではないかと思われる。



写真1 ろう者による「森のインタープリテーション」

自然物の表現についてはCLが自然物の特徴を捉えるのにもっとも適しており、また手話ができない聴者もCLを通して「手話で楽しむサイレンスの世界」の入り口に立つことを容易にする。実際に最初に実施したアクティビティ「ノズ」のアレンジで「カモ」や「トンボ」をCLで表現してみせた時は、その場にいた参加者のほとんどが咄嗟に後ろに広がる池を振り返り、そこにいたカモやトンボの姿を確認している様子がみられた。また、私たちが表現した「ネズミ」はネズミの歯を示すものであったが、その表現を「モグラ」だと思った人がいて、私たちろう者のスタッフも、モグラには歯があるのだろうかという気づきを得ることができた。

また、最後に実施したアクティビティ「木の葉のカルタとり」のアレンジでは、葉の形などの特徴を捉え、参加者がCLで表現することができた。また、そのCLをみて、どの葉を表現しているかをほかの参加者が当てることができた。



写真2 木の葉をCLで表現

手話は、これまで日常生活の中で使うこともなかった聴者にとってはとっつきにくく感じるであろうが、手話の基本要素の1つであるCLは誰でも習得することができ、またCLで表現することの試みによって自然物の細かな描写ができるようになる。ネイチャーゲームのさまざまなアクティビティでは動物の動きや樹木の形などの身体表現が中心になっているものも多い。また、自然物の特徴が書かれたカードを使ったり自分がみた自然を絵で表現し相手に伝えたりするアクティビティもみられる。このようなアクティビティはすべて、自然をCLで表現するやり方にアレンジすることができ、手話通訳を介さなくてもろう者と聴者がシェアリングすることが可能になる。

自然に対する想像力、すなわちイマジネーションについても、ろう者はすでに自然をみて物語を想像したり自然物の気持ちになってみたりする感性が無意識に備わっていることが多いように思う。アクティビティ「自然へのインタビュー」は、普段の生活の中ですでに自分自身の内部で行なっている行為であり、ろう者それぞれのイマジネーションを聴者に紹介することは、ろう者の聴者に対するインタープリテーション手法として斬新であるともいえよう。

一方で、私たちろう者は相手の表情から反応を推し量ることが多いが、私たちがインタープリテーションをしている間、参加者の表情にはっきりとした変化がみられなかったことで本当に私たちはシェアリングできているかどうか不安になった場面もあった。終了後の参加者の感想を読むと、実は心の中では驚いたり楽しんだりしてくれていたのだということが伝わったが、ろう者と聴者がその場でシェアリングするには、お互いのコミュニケーションに対する文化の違いを知り、聴者がろう者のコミュニケーション文化に入りやすくするための工夫が必要であることに気づかされた。また、手話通訳スタッフからは、「やはり楽しかったり何か発見すると他の人に伝えたくるので、(参加者同士が音声で)喋り始めてしまう、それを止める・楽しい場に禁止事項(音声禁止)があるということが心苦しかった」という意見が出た。

そこで、今回は「サイレンスの世界」カードを参加者みんなの目に入りやすい場所に常に提示しておき、音声に頼らずにサイレントの世界を楽しもうという意識を高めるような環境を設定したい。また、手話を構成する1つである表情を顔に明確に出せるようにするために、さまざまな表情のイラストを示した「気持ちカード」を参加者に持たせるなどの工夫をしていきたい。

4 2 ページ目の注 3 参照

表1 第2回参加者の感想

	どのような、新しい発見があったか？	ろう者と聴者で自然の感じ方・見方にどのような違いがあると思われたか？	その他
1	キノコや葉っぱが色づいているのを見て山にも秋が来ているのだなと実感しました。	木の目など細かいところまで観察する力がとても優れてらっしゃるなとびっくりしました！	初めての体験で楽しかったです！ありがとうございました！
2	今まで気がつかなかった木の形や見たことのない葉を発見できた。体や身振り手振りで伝えることのむずかしさや楽しさを知れた。	ろう者の方は聴者が気付かない、気にしないところまで細かくみていて凄と思った	大変楽しかったです。ありがとうございました！
3	木を木として見るだけではなく、その模様や形を想像して考えるという見方を学んだ。	ろう者の方は、より視覚に凝らして物を見ており、聴者よりも多くの気づきがあると思う。	とても貴重な体験となりました。
4	自然を自分の身体で表現する楽しさと想像する楽しさはそれぞれの時間、体験に集中力を使い、素晴らしい経験になりました。新たな視点が広がりました。	一つ一つの物、声、人に対する視野、時空が聴者にくらべて新たな世界、ちがう世界観を持っていて感動しました。イメージの奥深さを感じました。	また参加したいので、今後ともよろしくお願いします。いつか一緒に活動したいです！
5	「見る」ということの意味の再認識、自分たちは耳が聞こえているからこそ、その情報をあてにしてしまっていて「見る」という事をしっかり行っていなかったと思う。	想像力の豊かさの点、「見る」ことで得られる情報を最大限に活かしていると思った。	やはりワークショップ中に耳栓等をして全く音を断っても面白い発見があると思った。
6	違う視点で里山を見ることができて、色々な植物も探せば探すほどいと感じた。あと、耳から入る音色も楽しめた。	私たちは普通に木は木、草は草とみていた。しかし、その中にも想像一つで色んなことをイメージできてたのしかった。また二人のことをみていて笑顔の大切さに気付いた。	本日はありがとうございました。このような貴重な体験により視野が広がった気がします。とても楽しかったですありがとうございました。
7	伝えるという事は当たり前のことだが、とても難しく大切なことだと改めて感じられた。一つ一つのことに注目していく楽しさ、耳が聞こえない人の視点がわかりとても面白かった。	いつもはさっと見のがしてしまうところにどんどん注目できる点。音がないため目の情報を精いっぱい理解していく点。	しゃべらないことは想像以上に難しかった。次にやる機会があれば完璧に聞こえない中でやってみたい。また相手に伝えるまでジェスチャーで伝えてみたい。
8	物を見ぶり(身振り?)手ぶりで伝えることの難しさが分かりました。口では伝えきれていないことも数多くあり、ろう者の方とは見方が違うと感じることも多く驚かされた。	普段は気にもしない木の形や葉などにも様々なイメージをふらませ、お互いに共感している所を見て、健常者よりも色々なことを考えて里山を楽しんでいるなと感じました。	葉を体で表現する、簡単そうで難しい貴重な経験ができて楽しかったです。今日はありがとうございました。
9	視覚でみたものをそのまま体で表現することが今まであまりなくて、体で表現しようとする物事の細かい所まで見られるようになるんだなと思いました。	目で細かい所までみて「あれに似ている」などで、相手に伝わりやすいようにしているなと思いました。	二人が話しているのをみて中に加わりたいなと思いました。そのくらい楽しそうでした。今日はありがとうございました。
10	普段はぼんやりとしか見えてなかったものが、表現しようとする過程でより細やかに見ることができました。	「あれに似ている」「あれに見える」と想像力を働かせるには、その対象に関心が強く持っていないとできないと思います。お二人は自然のなかの一つ一つをすごくしっかり見ているんだなと思います。	貴重な体験をありがとうございました。楽しかったです！
11	里山には今まで毎回か訪れ活動に参加してきましたが、今まで見ていなかった小さな発見、小さな気付き、そこからの自由な発想をすることの楽しさを感じる事が出来ました。	ろう者の方は目で見た情報からの発想の自由さを感じました。聴者は目で見て、耳で聴いた事を言葉として声に出して伝えることが出来ますが、ろう者の方は目で見た情報だけを相手に伝えており、しかし、その分相手にどのように表したら伝わるか、またどのように伝えようとしているかを考えることが出来ました。	とてもお二人が楽しそうにワークショップをしてくださったので、私たちもリラックスして参加することができました。また、多くの気づきもありました。有難うございました。

〔謝辞〕第1回、第2回ともに『ダイアログ・イン・サイレンス@宍塚の里山』プログラムを立案し進行を一緒にいただいた「環境に関する手話研究会」メンバーの北村まさみさん(つくばバリアフリー学習会)、須藤はるかさんに感謝の意を申し上げます。